

田村志津枝さん コラム

## PICK UP MOVIE

### 『ありふれた教室』

[2022年/ドイツ/ドイツ語/99分] G

監督・脚本：イルケル・チャタク

出演：レオニー・ベネシュ、レオナルト・シュテットニッシュ、エーファ・レーバウ、ミヒャエル・クラマー、ラファエル・シュタホヴィアク

© if... Productions/ZDF/arte MMXXII  
© ifProductions\_JudithKaufmann  
© Judith Kaufmann, Alameda Film

6/14~

### 議論を尽くした 先にあるものは？



学校というのは、多くの子どもにとって最初に接する社会だ。だからそこでどんな教師に出会うか、どんな友達と何を体験するかは、その後の人生に大きい影響を与える。ではこの作品には、どんな教師が登場するのだろうか？ 生徒たちは何を体験するのだろうか？

カーラは、新任の意欲的な若手女性教師だ。中学1年生の担任で、体育と数学を教えている。生徒を励まして活気ある授業をしようと努力を惜しまない。生徒は人種的ルーツも学力レベルもさまざまだがカーラは一人一人にうまく対処しているようだ。

だがこの学校には、何やら不穏な空気が漂っている。教師不足のため教師たちは過重な仕事を抱えて苛立っている。校長の方針はゼロトレランス、つまり問題があれば徹底的に調査し、規律を破った生徒は有無を言わず処罰するというものだ。だが何故か校内では頻々と盗難事件が起きている。

校長をはじめとする数人の教師が盗難事件の調査を始める。生徒に向かって、強制ではないから嫌なら拒否していいと言いつつ、巧みに威圧して調べを進める。生徒の心を傷つけるやり方に、カーラは憤りを感じた。それで独自に窃盗犯を見つけようと隠し撮りを仕掛けた。このときカーラは、自分も校長らのやり方に同調し始めてしまったことに、気づけなかったのだろう。カーラから犯人と名指された事務員は、頑として容疑を否定する。しかも彼女は、カーラのクラスの生徒オスカーの母親だった。

事態は思わぬ方向に発展していく。この作品の真骨頂は、生徒や親たちが教師や学校に対して大議論を繰り広げるさまだ。親たちは盗難事件をめぐる学校側の対応を厳しく批判する。生徒たちも独自に取材して新聞を作りあげて売り出す。オスカーも真実を知ろうと一人行動を起こす。生徒の抗議はエスカレートし、カーラの授業をボイコットして彼女を追い詰める。カーラもまた知らず知らずのうちに生徒を威圧することはなかったか？

この作品は手の打ちようもない混乱を描いているにももかわらず、どこかすがすがしさを感じさせるのはなぜだろう。それは、カーラも、オスカーも、他の生徒や親たちも、自分の意見を強く主張し議論を重ね闘い抜くからではないか。学校という大きい制度に一人立ち向かうオスカー。教師という仕事を自分なりに全うしようとして窮地に立たされたカーラ。とことん闘ったからこそ、彼らには新しい未来が開けそうな予感がする。

プロフィール

### 田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。